

タテハチョウの仲間は大きさが適度の中型で、アゲハチョウやモンシロチョウなどが、見た目、めちやくちな軌道で飛ぶのにくらべて、その飛び方はとても敏捷で、多くがグライダーの滑空に似て滑るようにスイスイと格好いい飛び方をする。活動しないときは羽をぴったりと閉じた状態で静止するためタテハ（立羽）とよばれる。昆虫採集をはじめた人の多くは、チョウの仲間中タテハチョウ属がもっとも好きな種類になると思われる。ヒメアカタテハのヒメは、小さい、かわいいというイメージをあらわし、このチョウの場合は近似種のアカタテハとの比較でやや小さめのアカタテハという和名になっている。ヒメアカタテハは多くのチョウと同じく花の蜜を吸うのが大好きで、今は花のない草地となってしまった高砂市西畑の花畑ではコスモス、マリーゴ



ールド、センニチソウなどの花蜜を求めてたくさんの数が飛び回っていた。人が近づくと驚いたかのように花を離れてヒラリと旋回したかと思うと、驚かせたはずの人の足元に「どうきれいでしょう？」と、その桃紅色の美しい翅表を全開した状態で止まってくれたりする愛嬌者だ。花蜜を吸う姿や路面で羽を広げる状況など、いろんな姿勢をみせてくれるので、前回紹介したベニシジミと同じく写真撮影に適したチョウ。ヒメアカタテハは日本で見られるチョウの中で、唯一、全世界に分布している。幼虫の食性が幅広く、ヨモギ、ハハコグサ、オオバコ、野菜畑のゴボウやシュンギク、コンフリーやゼニアオイの葉っぱも食べる。この食性の多様性が世界中に分布している主な理由となっている。西畑花畑周辺になぜ個体数が多かったかという、幼虫が主として野原のヨモギ類を食べて育ち、西畑花畑の周辺一帯にはそのヨモギがふんだんにあったから。幼虫は若いあいだは黒い毛虫で、最終段階の終令幼虫になると灰色を帯びたシックな色合いの毛虫となるが、幼虫がヨモギの場合葉っぱの先端部分を上手に綴った「巣」をつくってその中に潜



むという習性がある、巣の部分は葉っぱ裏側の白っぽい色がとても目立つため人間の目で探せばいとも簡単に見つけられ、蛹になるときも、周りの葉っぱに糸掛けをした巣の中で垂蛹となる。かなり気温の下がった12月中にも野外で幼虫を見ることがあるが、寒さには弱く、幼虫のままで死んでしまうこともあるという。また、ヨモギが雑草であるため、定期的な草刈と幼虫時代が合致してしまうと、幼虫は全滅してしまう。高砂市松波町のユーアイタウン



緑地公園（通称ひまわり公園）では、何度もそういう運命に会う状況を目にしており、草刈でや

られそうだと気がつけば、幼虫を回収してチョウにまで育てて放してやるということもしている。ヒメアカタテハはおもにチョウのまま冬を越す（越冬）とされ、幼虫や蛹で越冬する可能性も考えられるが、高砂地区での詳細調査データはない。

Jan. 4, 2020 今年の初チョウはヒメアカタテハ

返礼となる年賀状を出してもどる際、いつもは往路と同じではないコナラの樹など自然が多い住宅裏手の公園を経由するのだが、なんとなく元のルートを選んだのが幸いし、道沿いの人家垣根際にキクの仲間の花が咲き残る場所で、ひらひらとヒメアカタテハが飛びでてきて、日の当たる石垣の角

部分で日向ぼっこを始める。急ぎビデオカメラを取り戻って再訪すると、先ほどと変わらない位置でゆっ



くりと翅の開閉を繰り返している。昨年の秋に羽化した越冬個体が、暖かい陽射しに誘われて飛び出したもので、それにしてもみごとなまでに新鮮な個体だ。筆者はヒメアカタテハの越冬個体に出会えたのはこれが初めてで、なかなかいいスタートの2020年。

なお、本種については2004年7月23日に珍しい交尾の撮影記録を撮れているので示しておく。

